



あの日、未来は明るかったー。
慌ただしくもほっこりと、
現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

カラーテレビ狂想曲

Color TV rhapsody

2010年末、昭和の大女優、高峰秀子が86歳で亡くなった。3歳から活躍した子役出身だけに、サイレントからトーキー、モノクロからカラー、映画からテレビへと映像の発展と共に歩み、初の国産カラーによる映画『カルメン故郷に帰る』（1951）にも主演した。戦前からカラー映画のあった欧米よりもかなり遅れたうえ、まだ色調が不安定だったため、失敗に備えてモノクロフィルムで同時撮影する有様だったが、以後徐々にカラー化が進んでいった。

一方、昭和28年（1953）に放送の始まったテレビでカラー放送が開始されたのは昭和36年（1961）の秋だった。こちらは、アメリカ、キューバ（！）に次いで世界で3番目。当時の番組表を見ると、思ったよりカラーの番組が散見されるも、トップのアメリカとの差はまだ著しく、カラー放送受像機が高過ぎたため普及の歩みはのろかった。40～50万円という価格は国産の中級車にも匹敵し、アメリカのGE社製なら、これをさらに上回った。おまけに『スーパーマン』、『ララミー牧場』など、本国では途中からカラーになった番組も日本ではモノクロで放送され、カラーの番組自体が少ないとあっては購買意欲すらわかない。一般家庭では別世界の話だと諦観し、実際の色を想像するよりなかった。まっ、これはこれで結構楽しく、想像力の訓練にはなったが……。

我が家はもちろん、周囲でもカラーテレビ（当時は映画に準じて『総天然色テレビ』とも呼ばれていた）のある家庭はなく、電気店でも展示だけで通電しているところはまれだったので、まだ見ぬ幻の機器だった。完成したばかりの一応は駅ビルの地下で、カラーテレビの街頭放送をやっていると聞いて行ってみれば、何のことはない。3色ぐらいだったか、色の付いた下敷き状のプラスチック板をモノクロテレビの画面にくっつけただけ。この板は「お宅のテレ

ビがカラーになります」というような触れ込みで市販もされていた。こんな調子だから、東宝の怪獣映画を観に行き、テレビと同じチョコレートのCMが上映された時は、「わあ、きれい！」とどよめきが起こった。我が家では唯一、カラー放送に熱心だったNHKの現場で働いていた母親だけが見たことがあった。当時、出演者はカラー放送の仕様に合わせて口紅の色を制限され、髪まで染めさせられて、涙が枯れるほど強烈なライトを浴びせられた。そうした難行苦行には「カラー手当」が加算されたそう。それでも色はにじみ、ゆがんでも映るらしく、母親はカラーテレビに否定的なイメージを持っていた。

*

初めて一部にカラー中継が導入された昭和39年（1964）の東京オリンピックで、カラーテレビが一気に普及したと言われる。しかし、それ以降も僕の周辺の事情は変わらず、初めてカラーテレビを目にしたのは、確か東京オリンピック直後に課外授業で訪れた、家電工場だったと思う。映画館の時と同じように一斉に歓声が上がった。だが、色はにじんで画面も幾分ゆがんで見え、原理などを説明してくれたお姉さんが「黒色がまだ出せない」と言う通り、濃紺に映る髪の毛には幻滅を禁じ得なかった。母親の言葉は、どうやら僕をたしなめるための方便ではなかったようだ。

それから間もなく、親友のHらと一緒に下校していたKの家に、カラーテレビが入ったらしい。僕の周辺では第1号だ。しかしKは、「見せろ」と言うといつもはぐらかし、なかなからしい、の域を出なかった。Kは好奇心が強く物知りな反面、肝心なところで必ず尻切れトンボになり、強く促すとベソをかく。子どものうちに一生分の涙を使い切ってしまうのではないかと思うほど、何かにつけて毎日のようにベソをかき、これが面白くて出張してくる上級生までいたほどだ。カラーテレビの件も、チクチク自慢するのが僕やHの癪かんに障り、「本当はカラーテレビなんか無いだろう？」「『空



カラーテレビ1号機 写真：東芝科学館提供

テレビ』じゃないのか？」とからかうと、Kは例によって半ベソ顔になり「だったら来てみるよ！」と居直った。思い通りの展開に、僕とHは顔を見合わせてにんまりした。

約束の土曜日、雨上がりの午後にKの家を訪ねた。案内された居間には、確かに大きなカラーテレビが鎮座し、負けにくい体格の良いおっとりしたお母さんが、折を見てスイッチを入れてくれた。真空管のテレビは画面が出るまで時間がかかる。1秒が1分にも感じられ、ようやく画像が現れた。ところが、お母さんがチャンネルを何度回しても、カラーの画面が出てこない。「あら、この時間はどこもカラー放送をやっていないわ」。新聞を手にしたお母さんは、申し訳なさそうに言った。僕はかすかに赤味があった単色コピーのような画面を、虚しく見つめるだけだった。

うちにカラーテレビが来たのは、この少し後ぐらいだったと思う。ある日、学校から帰ったら、今朝まであったテレビがふた回りくらい大きくなっていて。それまでもテレビを入れ替える際は、電気屋さんが庭の高いアンテナと何度も往復して調整に四苦八苦していたが、今回は特に大変だったようだ。初期のカラーテレビは鉄の皿を持って前を横切っただけで調整が狂うと聞いたことがあったが、このころでもさらに本体のいくつものツマミを回しながら調整しなければならなかった。帰宅した叔父は電気屋さんの調整が気に入らなかつたらしく、しばらくいじり直し「ここは絶対いじるな！」と僕に厳命した。

カラーテレビは髪の毛も黒く見え、色の

にじみもゆがみも感じられなかった。突然のことではわかには実感がわかなかったが、次第にやはりカラーはいい、きれいだ！と感動が込み上げてきた。この感動に比べたら、ハイビジョンだのデジタルだのは目じゃない。とりわけ、今までモノクロで観ていた番組をカラーで見た時は、喜びもひとしおだった。

いまだに、モノクロの旧作映画のカラーナップなどを見ると興奮を抑えきれない。10年ほど前に、故郷の蔵から出てきたという野口英世のカラー写真を見た折もそうだった。想像していた色が合っていればしてやったりの気分で、違っていても新たな発見をしたようで、またうれしかった。

発見といえば、鳴り物入りで始まった『FBIアメリカ連邦警察』の主演エフレム・ジンバリスト・ジュニアの色が黒いのに驚いた（彼は純粋な白人だ）。日本では同じ日にリピート放送していた、モノクロの『サンセット77』の時はまったく気付かなかった。カラー調整が狂ったのかと思ったら、他の出演者は普通の顔色をしていたので彼が地黒なのだ納得した。雑誌にも同様な感想が載っていた記憶がある。

カラー化の余波は各方面に及び、よほどうれしかったらしく、場違いに派手な服を着ている出演者が目立った。カラー調整はどうしても各自の主観に左右される。微妙にずれていると感じたら、僕は電話ボックスなどが出てきた時に電話の色に合わせて調整していた。もちろん、調整をいじったことは叔父には内緒だ。

三洋電機が「カラー劇場」と銘打った、初の国産カラーアニメといわれる『ジャングル大帝』が始まり、エノケン(54ページ「粉末ジュース」の項参照)の「うちのテレビにや色が無い、隣のテレビにや色がある……」のCMや、直後の『ウルトラマン』がカラーテレビの普及にさらに拍車を掛けた。カラーテレビを買って中華料理店にご招待という電気店もあったそうだ。

しかし、新たな火種も生んだ。「画面の片隅に出る`カラー、のテロップが嫌味たらしい」とか、海外旅行が自由化される以前から世界中の文化や風俗を紹介していた『兼高かおる世界の旅』で「きれいだきれいだ」と連発するのはやめてほしい、うちは白黒テレビなんだから……という投書が新聞に載ったりもした。

他方、カラーテレビは目に悪い、有害な電磁波が出るなどの俗説も信じられ、時期尚早と買い控える家庭も少なくなかった。うちより裕福なはずのHの家もそうだったようで、NHKの『タイムトンネル』というアメリカのドラマをうちに観に来ていた。自ら実験台となったタイムマシンの研究者が、さまざまな時代をさまよって歴史的事件に遭遇する話で、タイムワープする際の万華鏡のような映像は確かにカラーで見る価値はあった。

ある時、Hが珍しく遅れてやってきた（待ち合わせにはよく遅れてきたが、放送にはまず遅れなかった）。無灯火で自転車に乗って警官に職務質問され、「タイムトンネルを観に行く」と言ったら「ん？ 丹那トンネル？」とかえって怪しまれたそうで、2人で腹を抱えて笑った。

やがてHを始めカラーテレビを入れる家庭が相次ぎ、中には電話でわざわざ報告してくる奴もいた。昭和45年(1970)の万博のころまでは、それくらいインパクトのある家庭の一大事だったのだ。番組の方もカラー化率100%の目標をほぼ達し終え、新聞の番組表の表示も、逆転してモノ

クロのみに付くようになった。にもかかわらず、昭和50年代の中ごろまでは、モノクロの旧作映画を放送すると「急に色がなくなった」「テレビが壊れた」といった電話がテレビ局に必ずかかってきたという。車、カラーテレビ、クーラーのいわゆる「3C」のうち、カラーテレビは最も高度成長期を牽引した原動力だったのではないだろうか。クーラーの入った日は覚えてなくとも、カラーテレビが来た時のことは鮮明に覚えている人が多い。

素朴とも言える目標に向けて懸命に働けば、それだけの対価を得られた。物のあふれ返った現在ではこうした対象を見つけることが難しいどころか、生活の基盤さえ危うくなってきた。些さ細さい(でもなかったが)なことへ喜びを見出し、それを共有できた社会の方が健全だし、ずっと好ましいのは言うまでもない。

著者：千葉豹一郎
作家・評論家。日本刑法学会、ベツト法学会会員。
著書に『法律社会の歩き方』(丸善)『スクリーンを横切った猫たち』(ワイス出版)の他、『東京新聞』、『猫生活』(緑書房)『ミステリマガジン』(早川書房)をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。



あの日、未来は明るかった——。
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

大田区大森を中心に、
高度成長期の東京が
いきいきと甦ります。

ケース先生や力通山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱい少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の絵柄の馬肉100%コンビーフや怪しい溶けないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

※当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて*
本文：108 ページ / 映像：2分23秒 2012年9月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980円(税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区松原 2-34-9
TEL.03-5376-7233 FAX.03-5376-7246 info@uni-w.com